

# 東南アジアに於ける古代王国の成立と 土着都市の形成

——人間生態学的アプローチ——

矢 崎 武 夫

——目 次——

1. ま え が き
2. 地域生活の変化、文明の伝播、王国と都市の成立
3. 聖なる内陸宗教政治都市および俗なる沿岸市場都市の構造と其の地方支配

## 1. ま え が き

私は本論の中で印度及び中国の文化圏にある東南アジアの古代王国と其の首都の構造と変動過程を主として社会学及び人間生態学の立場から記述しようと思う。そこで先づ本論で述べた内容を略述し、研究の方向を示すと共に方法論の若干の問題を述べてまえがきとしたい。

世界の諸地方の異った文化が接触し、文化伝播が行われ、人間の知識を広め経験を豊かにし、新たな人間協力の組織が生れるごとに新しい文明が生れた。

東南アジアの部族社会が採集経済や焼畑農業に依存し移動的であった状態から水田農業が導入されるようになると、生産力が上昇し、部族は定住するようになり、権力や富の不平等分布が強まり、首長の権力が強化されると共に慣習法の確定を伴って社会構造や価値構造の安定した封鎖的な社会を構成した。部落が経済的、政治的、宗教的にも成長してくると、首長は孤立的、封鎖的であった諸部落を統合することによって支配領域の拡大を試みるが、各部落の独特

な伝統的な価値を基礎にした部落の自律性を破ることは困難であった。此の部落の構造は後の王国の構成、ひいては都市の形成の基盤にはなかったが、印度の偉大な文明の伝播なしには王国もその統合中心としての都市も生じなかった。

国家や王権や首都および官僚による統治組織は、大宇宙や小宇宙、人間の世界に関する並行論を基礎とする印度の宇宙哲学、或は偉大な文明を土着の王や知識層や官僚が借用することによって可能になった。此れが制度的に確立して首長はカリズマ的な力をそなえた王となり、神権的な王(Devaraja)の権力を確立して封鎖的な村落をこえた政治、宗教、経済的な権力的な統合組織としての王国が確立し、王の座、世襲的な官僚的統合機関および寺院の位置は、宇宙のイメージを以って計画された首都を形成することになった。かくて構成された首都は文明の頂点をなし経済的現象であるよりも、政治、宗教的現象であり、王国の中核として王の権威の正当性を示す現象であった。都市は有機的に構成された王国の全体社会体制の部分であり、王国の成立と都市の発展とは時を同じくし、王国

の体制の変化は、都市の立地も構造をも変化する関係にあった。

農業生産力の低かった時代に都市が発展するには外国との交易に依存せざるを得ず、沿岸市場都市が農業王国の統合中心としての内陸の聖なる都市に先んじて現われたが、両者とも王国の首都として宇宙的信仰を都市の構造の中に表現していた。内陸の聖なる都市は都市文明の発生の起源に於て複合的であっても多かれ少なかれ民族社会と共通性をもつ意味で原初的都市化 (primary urbanization) の結果生じた系統発生的変容 (orthogenetic transformation) の都市であった。一方沿岸の市場を中核とする都市国家の首都としての沿岸市場都市は異民族の接触の結果、即ち二次的都市化 (secondary urbanization) の結果生じたコスモポリタンの性格を持つ異種混合的変容 (heterogenetic transformation) の都市であった。

此等の都市は東南アジアが西欧資本主義国の侵入を受け体制構造を独立王国から植民地に変化するにつれて、植民地拠点都市としてのプライメイト・シティ (primate city) が唯一の大都市となり独立王国の首都としての機能を奪われると共に王国の伝統的な文明は解体変質していった。

以上が此の論文の要旨であるが、本論に於ては原始的状态にあった民俗社会の生産技術の発展、社会権力構造の変化、印度文明の伝播とその受容の方法、古代王国の形成、其の統合中心となる系統発生的変容の聖なる都市、国際関係によって成立している異種混合的変容の沿岸市場都市の構造、此等都市の地方支配の順を追って植民地化以前の東南アジアの王国と都市の形成と其の構造の問題を論じたい。

副題に人間生態学のアプローチとしたが、これは従来社会学者によって述べられてきた人間生態学より広い意味で用いており、種々な修正

はあるが、大略は私が已に発表した主な著書及び多数の論文の中で用いた方法<sup>(1)</sup>を意味する。略言すれば自然環境及び資源、技術、文化、伝播、生産力、生産関係、機能分化、地位、役割、価値、階層、階級、権力、威信、支配、制度、移動、競争、闘争、協力、統合、民族、家族、第一次及び第二次統合機関、官僚制、社会的合意、社会統制および狭義の生態的構造としての地域構造等の概念を用い、地域を基盤とし、以上の諸概念を含む複合概念としての未開で自律性の強い民俗社会、農業生活を基盤として民族国家社会の一部であり都市と関連するが相対的に自給性の強い農村社会、同じく民族国家社会の派生体であるが大規模で多くは専門化した多数第一次の統合機関を中核とし、広い地域範囲の統合活動を営む非農業的な都市社会、都市農村を含み何等かの基準で同一性をもつとみられ区域づけられた地方社会 (region)、所属の確定した領土と人口および多くは一定の文化を有し多くの活動を権力的に統合し主権をもった民族国家社会、構造的に関連した諸民族国家社会よりなる国際社会及び国際関係等、これ等を特に都市社会を焦点として相互に構造関連させ、社会を変動の過程に於いて研究するマクロ的な研究方法が私の意味する人間生態学的方法であると言える。私はこのマクロな方法によらなければ都市、特に首都或は主要な都市の成立や其の構造や変化の説明は困難であると考えている。以上は本論の記述に必要な若干の問題に触れたに過ぎないが、新しい人間生態学の一般理論に関しては機会を改めて発表したい。

## 2. 地域生活の変化、文明の伝播、王国と都市の成立

東南アジアでは西暦紀元前から採集経済から焼畑農業に進んでいた。祖先を崇拝する家族や部族が社会の単位を構成し、多様な文化をもち

人口規模は小さく、文盲で孤立的な生活をしてきた。焼畑農業では彼等は農地を絶えず移動しなければならず、使用した農地の恢復に時間を要して次の使用に間に合わず、荒地化してしまうことも多い。此の技術をもってしては生態系の維持は困難で、人口の増加があれば人間の生活と自然との間の均衡は容易に破壊され人々は窮乏生活を強いられていた。此の時代には非農業的活動を行う指導者を養うだけの生産力に不足していたから、部族の首長等の指導力は弱かったが土地の取得の問題もあって他の部族との争いを生ずることが多く、戦闘的でこの為の協同組織があった。

此等の部族の人達は首長を通じて交換も行ってたので全く封鎖的ではなかったが、外部にあるより大なる政治組織に統合されてはいなかった。

焼畑農業がいまだ一般的であった頃に民族的信仰や文化的特性に共通性をもった地方に水田農業が導入された。水田農業は気候、土質に適応性を要し、灌漑の技術の発達や耕し、植付け、雑草取り、刈り入れに新しい技術と、多くの労働の投入を要する。此の方法の採用は人間が新しい技術と人間の組織を創造し、人間と自然環境との関係を変化することを意味する。彼等は経験を通じて水田農業が焼畑農業より生産性が高く、人口の扶養力を増すことを見出した。水田農業ははじめは泉や水のような水の管理の容易な溪谷や水路の位置からはじまったが、灌漑の技術に関する知識を得てくるにつれて、平地に下りてくるようになった。水田農業によって人々は移動を止めて社会経済組織のみでなく、政治宗教的価値も安定性を得るようになり、一定の地に人口が集中し増大した。そして労働の協同組織、賦役や小作制度等新しい社会関係を作り、土地は集約的に用いられ広範囲に耕されるようになった。<sup>(2)</sup>

水田地方には今日のマレーシアの水田地方及びジャワが其の分岐であるとみられる村落構造の特色をもった祖先崇拜に基づく政治組織が現われた。フィリピンのバランガイ (barangay) と呼ばれる村落も水田農業村落の型の例である。

バランガイは単一の指導者の下で水田農業を行っている小人数の集団からなっている。此等の集団は焼畑農業の時代には戦いのために作られた組織としての地位の構造が固定化し、食料の生産や宗教に於て協同が強まり首長の指導力は強化され、世襲化され、双系の血縁関係の人間を頂点とした経済的従属者及び奴隷からなっていた。

労働を指揮する権力は以前から存在したと考えられる宗教的に規定された秩序に従って成員に分配されて、威信は正当化され象徴化されていた。指導者と従属者の関係も固定化して、個人の意志による合理的な決断や力は社会的慣例の狭い枠の中に限られていた。此の部落の階層は必要に応じ伝統的なものとなり、指導者は一般庶民に賦役を課する権利をもち、より低い指導者はより小さい権利をもっていた。庶民はある程度他に侵されない自らの労働権を持っていたが、奴隷は殆ど何等権利らしいものは持っていなかった。かくて労働の支配と政治的地位が融合して制度化され、固定的な階層化された封鎖的な社会が形成されていた。

此の集団の人間関係は永続性をもって構成されたものであるが、経済、軍事、衛生、宗教等の理由によって移動することがあるので、此の集団は地縁的であるよりも人間関係に基礎を置く集団であった。<sup>(3)</sup>

部落が経済的にも社会構造的にも成長してくると、首長は次第に部落の生産や防禦や呪術的な宗教儀式的責任をとり、尊敬と信頼を受けるようになった。そして外部の人間を奴隷とし

て、また経済的な従属者として獲得して権力を拡大していった。これら首長によって集積された権力と威信は部落の慣習法の裏づけを得ることによって安定し、其の地位は子孫によって承<sup>(4)</sup>け継がれた。かくて支配的な家族の地位は強まり、首長は勇氣、富、縁組み、生来の才智等の手段を用いて、限られた範囲ではあるが其の権<sup>(5)</sup>力は周辺及び地方におよび成長していった。

首長は従来独立していた部落を結合していったが此等を政治的及び領域的に統合してゆくには多くの困難があった。此等の成長していった首長は、各々の部落が伝統的な自律性を保持しているから、これ等の部落及び其の長の挑戦を受けることも多く、獲得した部落も統制してゆくことは容易でなかった。また拡大した領域に対して競争相手となるような他の首長の侵入を防ぐ努力を怠ることも出来なかった。

更に部落は伝統的な慣習法によって部落内の権力のあり方を規定しており、他の部落との合併を認めなかったから、拡大の努力は妨げられ、広い範囲に権力的統合を拡大し或は其の安<sup>(6)</sup>定的な秩序の維持は困難であった。

社会的に不安定であり生産技術は低くて農業生産の余剰も多からず、部落は固定的に組織化され、慣習法によって其の固定性と共に独立性と封鎖性が強められたから、確定した広い範囲に亘る政治、宗教、軍事、経済等の権力的統合組織としての国家やこれを運用するために専門的知識を有する人間によって満される政治、宗教、軍事等の統合機関は発達せず、国家や都市が発展する社会的基礎が形成されなかった。実際東南アジアに王国と其の統合中心としての首都とを現出させる政治、宗教、軍事、経済的組織は土着の文化のみを母胎としては生ぜず、西暦紀元一世紀以来中国文明と共に印度人によって伝えられた印度の偉大な文明が土着の王や知識層及び行政、宗教、軍事官僚によって借用さ

れることによって可能になった。

此のような状況の中でヒンズー教が部族的慣習から首長を解放するものとして到来した。封鎖的な村落を乗り越えて広い地域を統合せんとする首長にとって伝統的な宗教は指導原理とはならなかった。ヒンズー教は神と人との遭遇と言う命題の下に広い範囲にわたる絶対的支配を可能にする神権的な王に関する哲学及び神権的な王を頂点として階層が下がるにつれて精霊的な力が少なくなると言う社会的地位の秩序立てに役立つ宗教であった。ヒンズー教の神権的な王の観念は神の化身としての王であり、世俗から離れたところに自己をおき、超自然的、超人間的であって異例な力をそなえたカリズマであり、部落の首長をその束縛から解放する基本となる新しい宗教でもあった。

王たらんとする首長はヒンズー教の宇宙論によって神の使命を受け、伝統的な制約から自らを解放していることを宣言する。彼等は軍事力と神からの靈感によって伝統を破り自らの意志を実行に移す。王は敵の攻撃に対し支配に服する者を守ることを保証し、其の能力のあることを事実として示すことが、彼等の神性の証明であった。かくて部落の権利と義務の慣習法的规定は階層的に構成された新しい権<sup>(7)</sup>力の決定によって置きかえられることになった。

社会変化の重要な手段を与えた印度文明の東南アジアに対する伝播は、軍事的侵略によってではなく、長期に亘る集団をなした商人の逐次的平和的進出によって行われた。商人達の季節的な来訪と共に土着人を支配する貴族とみえるような僧侶、知識階層及び冒険家も来住した。

商人には二つの型があった。其の一つは投資家であり投機家としての貴族商人である。彼等はしばしば東南アジアに定着したが其の数は少なく、彼等の洗練された規則正しい生活法も周辺人口に僅かの影響を与えたに過ぎない。大多

数をなす印度商人は印度社会の低階層の出身であって通例は行商人であり印度洋の周辺を渡り歩いていた。彼等は貧しく教育に欠け印度の儀式や美術に関する精細な形式を伝える仲介者となり得るものではなかった。更に彼等は外国の港湾にあっても孤立した集団の中に閉じ込められていたから彼等が商品の取引をする以外土地の人間と交る機会<sup>(8)</sup>は殆ど無かった。

東南アジアは已に古代的な可成りの社会経済組織を受け継いで居り、支配者達は自らの政治的な地位を正当化し臣民を階層づける手段としての印度的な概念の価値を知っていた。此の目的を達成するために王の勅書などの定式文や儀式を熟知している印度の宮廷のバラモンの僧侶と、呪術家を招致した。彼等の数は少ないが有力な集団であって、呪術的な儀式による王の聖職授任、ヒンズーの宗教的信条、支配者の家の神話学的な系譜、印度の肖像研究、叙事詩的人物と構想及び印度宮廷生活の極めて複雑な儀式を紹介した。彼等は印度文明の洗練された側面を伝え得る唯一の集団であった。<sup>(9)</sup>僧侶と共に印度の技術が宮廷に入り支配者の美術的活動と宗教的活動は共に東南アジアに深い影響を与えた。<sup>(10)</sup>現われんとする土着の王と貴族は伝統的な文化を基盤にしながら、印度文明を此の地に広める重要な役割を担い、神権的な王の権力を樹立し、政治、宗教、経済的な統合組織としての王国を確立し、政治、宗教的に規定された官僚制的統合機関の位置としての聖なる都市を形成することになった。

かくてヒンズー教は部落をこえた政治単位を構成するに役立ち、村落の首長を王に、村落を町に、精霊の家を寺院に変じていった。これは精神的、宗教的な変革であると共に、政治的、経済的、美術的変革でもあって、伝統的な村落の自足的な政治、宗教、経済的統合から、早期の王国全体を統治する専制主義への移り変わり

あり、土着文化に代る文明社会の出現であった。

王国の出現後も大多数の人口は伝統的な文化をもった村落に居住しており、バラモンや土着の上層が形成する官僚機関の影響は少く、伝統に基づく孤立的な生活をしていた。一方、文明の伝播に対し此れとはことなつた生活法が發展し、顧問としての僧侶の指導下で首長は神権的な王となり、部族の戦士は訓練された軍人に、優秀な農民は官僚に、長老政治は王政に、聖なる森や墓地は寺社の複合に変化し、此等は都市を形成していった。<sup>(11)</sup>

忠誠に関するバラモンの観念、サンスクリットの文学、ヒンズーの神話や聖なる法典や美術、更に貴族の慣習等を通じて、此の地は小なる伝統 (little tradition) の社会から大なる伝統 (great tradition) の社会に、文化から文明に、民俗社会から都市社会に変化していった。此の地は村落に住む臣民には理解の困難な政治、宗教、芸術的機関の中心であり、民俗社会の伝統的文化の中に生きる村落とは異質の神権的な王の座であり、偉大な伝統をもつ聖なる都市であった。<sup>(12)</sup>

古代王国を形成する基本となった国家や王権や首都と其の統治組織に関する原理は、大宇宙と小宇宙及び宇宙と人間世界の間の並行論に基礎を置いている。此の信仰によれば、人間は宇宙の諸方向や恒星や遊星から発する力の絶えざる影響下にある。此の力は個人や集団や国家が其の活動を宇宙と調和するかどうかによって、福祉と繁栄或は大災害を生ずるかが決する。個人は此の調和と繁栄を占星学、吉凶暦、其他の規定の示すところに従うことによって、また王国と宇宙との調和は宇宙のイメージに従って王国を構成することによって得られるとする。王権と国家の間の宇宙論は、王や皇后、大臣、中央地方の官僚や僧侶等のあり方が儀式や慣習、美術更に都市、宮殿、寺院の計画や構造と結び

について規定されていた。ブラマンの教儀によると、人間の世界は環状の七つの大洋と七つの大陸にかこまれた円形をなした中央大陸よりなっている。此の世界は七つの大洋の最後の大洋をこえたところにある山脈にかこまれて閉ざされており、此の世の中央にメルー山 (Mount Meru) とする宇宙の山があり、太陽や月や星は其のまわりをまわっている。此の山の頂上に此の世の八柱の守護神の住居にかこまれた諸神からなる都市がある。<sup>03)</sup>

かくて首都は国全体を表現するのであって政治文化的中心である以上に王国の呪術的中心であった。王の戴冠の儀式と首都巡幸は最も重要なものであって、此れによって王は首都のみでなく、王国全体を所有することになる。国全体の宇宙的な構造は地方の数と位置により、また王の任命する知事の機能も象徴によって表わされる一方、首都は王国と言う小宇宙の中のより小なる宇宙の現実的なイメージをもって美術的に形づくられている。<sup>04)</sup>

宇宙はメルー山を中心にして存在するから、より小なる宇宙である王国では中心に首都を有するが、これは必ずしも地理的な中心を意味するのではなく象徴上の中心であった。首都の山の頂上にある寺院はメルー山と同様に美であり、しばしば中央の山は寺院によって表現されるし、岩や練瓦や木も山の象徴があると考えられている。<sup>05)</sup>

12世紀の後期につくられた首都アンコール・トム<sup>06)</sup>の遺跡によると中央の山は此の世の主である寺院であり、其の四つの側面は塔によって飾られている。都市は四つの主要な方向に向って壁と堀によって囲まれている。各々の側の中央に門があり、東側の第五の門は宮殿の入口につながっている。門の上の塔は、守護神の四つの顔でかざられていた。かくて小なる世界であるアンコールの都市は全体の王国と共に宇宙の主

の守護の下にあった。

王自身は言うまでもなく王の宮廷の皇后の地位や大臣、一般官僚、地方の知事に至るまでの官僚制の構造にも宇宙的原理が階層の頂点から末端にまで及んでおり、王国は星と諸神よりなる天国の世界を象徴するものと考えられていた。王の宇宙的神の役割は特に戴冠式の時に強調される。其の主な特徴は王をメルー山を象徴する王位に置き、守護神にかこまれ、種々な象徴的な儀式をとまなび王はメルー山との自己一致を示し、王は宇宙の軸であり、太陽とも一致していることを示すのである。<sup>07)</sup>

東南アジアの宇宙的国家は神権的王の概念と密接に結びついている。王の神聖はヒンズー教、仏教等の宗教によって種々な形で考えられている。ヒンズー教は王を神の化身或は神の子孫或は両者であると考えている。しかし神の化身の理論は正当な王の地位の上昇を意味するのみでなく、その人間が如何なる悪業を重ねている者であっても、王位を奪うことの合理化でもあった。また国の支配者が王国のメルー即ち宮殿の所有者であることは危険を伴っていた。王室の一族であっても外部者であっても、僅かの兵力による奇襲によって宮殿を占拠することができ、これは通例王国全体を制覇したことになる。

小乗仏教の場合には王位の正当性を示す神の化身の代りに更生や宗教的な精進が象徴している。反乱や殺害の手段を用いても、良い因縁や前世の精進によって人は王として生れ或は生涯王権を保持することが出来る。王権が化身によるろうと、或は前世の因縁であらうと王権は神の召しによるとする理論は王位に上る世襲的な権利を保証することになる。王位を奪おうとする者はしばしば彼等が倒した王朝や前の王朝と自己との結びつきの系譜の解釈を行って正当性を主張しようと努める。<sup>08)</sup>

王の神格化は其の地位を臣民に対して高い地位に引上げたが、これは政府や国を安定し得たことを意味しなかった。化身や更生は横領者に口実を与え、王位を奪うに宮殿や王の表章を奪取することで国全体の王として受入れられるに充分であった。また王の巨大な権力と其の行使に制限が無いために権力の濫用が行われ臣民の反抗を受け、地位の失墜を早めることもあった。また王位の継承の規則が不明瞭で決定を下す人物も不確定であった。従って、東南アジアの諸国では不断の反乱や略奪があり、これが一般的な伝統となつて、王権と共に王国の安定も維持することは困難にしていた。

封鎖的だった村落の諸地域を権力的に統合せんとする王にとって、権力は存在する社会的価値に依じて行使され伝えられるものである以上、王は王位の正当性を聖なる言葉、宗教的信条、王位授与等儀式を通じて人々を教化し認めさせ、王が神との自己一致を明かにすることによって社会の人々の承認を得ることができ一方、伝統的な慣習法の廃止を望まない地方部族の反抗をかわし、新しい信仰の優越性を示し、寺院の建設や土木事業を行なって稲作文化に基づく王国形成の基盤をつくり、また軍勢力を用いて外部の略奪者から臣民をまもり社会秩序を維持することは容易ではなかった。

王は大規模化し複雑化してくる王国の政治、宗教、軍事等の事業を遂行するために、バラモンの僧侶や訓練された土着の人々を集め、宇宙哲学の原理に従って、分業の体系を定め、人々に地位と役割と報酬を与えまた集団を統制する規定を定めて官僚化した宗教、行政、軍事の統合機関を構成した。此等は大規模化するにつれて内部の機能を分化し権力も分散して、王の直接的な監督から独立した組織として機能しはじめ、専門化した各々の地位は世襲化されて、社会のエリート層を構成した。そして此等の統合

機関は宗教、政治のみでなく軍勢力をも用いて王の権力を保持するように土着の体制を構成した。

王の座である首都には王国全体から集められた徴収物がたくわえられる王の倉庫があり、其処から王の家族、官僚或は軍人の報酬が支給された。王の都市の建設のために大規模な計画が作成され、農民の賦役によって王の權威を示す記念碑的な建物がたてられた。農民の地位は自由な土地所有者から、戦争や農業植民地から連れて来た農奴や奴隷まで種々であった。

此等の王国の建設と維持は水田稲作の生産物からの税及び賦役に基づいていたが、其の実施のための民衆の教化は王の支配下の官僚による河川や運河や道路や灌漑農業の建設によって可能になった。凡ての臣民は王に奉仕することが求められたが、その奉仕は行政機関によって官僚的に組織され統制されていた。

### 3. 聖なる内陸宗教政治都市および俗なる沿岸市場都市の構造と其の地方支配

東南アジアは中国や印度の文明の伝播がはじまる西暦紀元一世紀より以前は採集経済或は焼畑農業を行い生産技術が低く、移動的であり、孤立的に分散した小規模な部族社会からなっており、権力も分散していた。より生産性の高い水田農業が普及して人間と自然環境との関係が変化すると、人口の扶養能力を増し、人口は一定地に定着居住して社会、経済、宗教的に安定した組織をつくるようになった。部落社会の人々の間で社会経済的機能が分化し、社会の階層化が進み、権力や富の不平等な分布が高度化して、上層への集中が行われると共に支配者によって権力的に広い範囲に亘って諸部落を統合する活動が行われてきた。しかし地域の自律性、封鎖性が強く、広く確定した範囲にわたる政治、宗教、軍事、経済的な権力的統合組織とし



ての国家も、また其の組織を運用する統合機関も発達せず、国家や都市が発展する社会的基礎は形成されなかった。

東南アジアに王国と其の統合中心としての、政治、宗教的な統合機関の所在地としての都市の発展は土着の文化のみを母胎としては生ぜず、部落の封鎖的な慣習法を克服した新しい社会の構成は、土着の王や知識層及び官僚が印度人によって伝えられた偉大な文明を借用することによって可能になった。

古代王国を形成する基本となった国家や王権や都市の原理は大宇宙と小宇宙と人間の世界とに関する哲学でもって、個人や集団や国家が宇宙の活動と調和するか否かによって其の繁栄を齎すか或は災害が生ずるかが決定する。王国と宇宙との調和は宇宙のイメージに従って王国を構成し、王権や僧侶や官僚のあり方及び都市を計画することによって得られ、夫々の存在の正当性が保証される。

かくて構成される都市は文明の頂点をなし、経済現象であるよりも、政治、宗教的現象であり、国家体制の中核として権威の正当性を示し、有文字文化や支配的なイデオロギーを創造し伝達する位置であった。<sup>20</sup>

此のようにして王国を統合する中核として大規模な政治、宗教、軍事的な統合機関及び此等の機関の運用を司る多数の非農業的或は非生産的な人口を扶養し、それらが機能するには、農業の余剰の存在と其の農村より都市への吸収が前提条件となる。都市は農業的余剰の主なる消費者であり、権力と富と伝統の集積地点であり、文化の新たな型の主な開拓者であり、侵略者による攻撃の主な目標でもある。<sup>21</sup>

早期の小規模な中心は宗教的中心であって農業的余剰は貢物とみられ、経済の発展には関係なく、支配層を扶養するに役立つものであった。しかし農業生産の大した上昇もなく都市が

拡大するには、其の富の獲得の為に外国との交易に依存せざるを得ず、大多数の都市は早期には其の存在を保証する為に主に大陸との交易と次で農業的余剰生産の両者に依存していた。

東南アジアでは16世紀西欧資本主義が進出してくる以前にフィリッピンを除いては、1000年以上に亘って都市が存在したが、5世紀の頃になって政治、経済、技術的發展の結果二つの主な型の都市地域に機能を分化した。其の一つは主として内陸に位置する“聖なる宗教政治都市”であり、他は“俗なる沿岸市場都市”と呼ぶべきものであった。勿論両者は分析の手段として用いうるべき概念であって、多くの都市は立地に関しても、構造に関しても大なり小なり両者の性格をそなえている場合が多い。両者とも王国の宇宙的信仰を都市の計画の中に表現しているが、都市成立の経済的基礎や地形や防禦の仕方が諸都市の間に種々な相異を生じた。

歴史的な成立過程からみれば沿岸市場都市は東南アジアの本土でも島嶼の部分でも一般に聖なる内陸宗教政治都市に先んじて西欧植民者が到来する遙か以前一世紀頃から相当数あったが、此处では本論の原初的都市化の過程に成立する王国の統合的中心としての都市の組織的記述に役立ち、全体の理解を容易にする為に内陸の聖なる宗教政治都市から記述をはじめることにする。

内陸の聖なる政治宗教都市は農業王国の政治的、宗教的、軍事的中心であって其の繁栄は王の支配する農村の広さと豊かさに依存していた。此の首都は支配下の農民による公共事業や軍務への参加、農業生産物の王への納税によって成立っているので、交易は沿岸市場都市程重要ではなかった。首都はバラモンや仏教徒の知識層が先づ偉大なる伝統を樹立し、確固たる基盤をもった宗教的、道德的規範を基礎にしており、交易は富や権力の源泉ではなく、交易等の



技術変化が齎らす社会的影響は中和され、偉大なる文化はゆるぐことなく持続された。

首都の位置は周到に星占いを適用した後に選ばれ、社会に関する宇宙の信仰のイメージから一定の形体をもって計画され建設された。首都は建物の単なる集合ではなく、永続的に聖なる経験を人に与え、儀式を中心とする宗教的依存性を人々の間に育てるように計画されていた。首都は宇宙の計画を地上の王国にもたらす形態で組織立てられ、地上に人間の小宇宙と天の大宇宙の両立する状態を作り出すことによって、国家の調和と繁栄が保証されるものと考えていたから、首都は天の原型の縮図<sup>24</sup>として神と人間の交叉する点を意味していた。

ヒンズー教の信ぜられている首都では中央に丘があるか或は大伽藍があり、儀式の場として用いられ、王国の軸をなすメルー山を象徴していた。多くの首都では王国の権威が中央に位置する寺院或は宮廷から王国の遠くまでとどくことを強調するため建物、橋梁、門や道が方向づけられていた。

首都の主たるものは寺院、王の宮殿、都市の城壁及び堀であって、此れは天を再現するように計画されていた。勿論都市の位置する地形や防禦の配慮から形態に変化は見られるが、計画に類似の点が多い。宮殿と主たる寺院が都市の中心にあり、都市の上層階層や役人の住居が此の附近にあった。周辺地域には職人、製造業者、宝物商や武具師がいた。外国商人と貧民は都市城壁の外に居住しており、権力と社会階層によって人口は中心から周辺に向って分布していた。此のような都市は石を用いてあり沿岸市場都市より一層永久性をもつものとして建設されているが、其の安定性は多く王の威信と権力に依存している。都市の位置は王の気まぐれによって変更することがあり、王のカリズマ的権力の弱化、王の死や戦争に於ける敗北が都市の

運命を決した。栄えている都市でも、王が放棄しようと思えば、都市の居住人口も自己の家をあけ新しい都市に移住しなければならなかった。王は宮廷内の不幸や星占術等に従って都市を移し、再建することも多く、それは移住を余儀なくされる住民には大きな負担となった<sup>25</sup>。

レッドフィールドとシンガー (R. Redfield and M. Singer) は都市文明社会発生の起源が複合的であっても多かれ少かれ民俗社会と共通の文化をもち、これを母胎として原初的都市化の過程を通じて、系統発生的変容の都市が發展すると主張する。系統発生的と言っても静態的なものではなく以前あった宗教的、美術的、哲学的なものに関連して再構成した文化をもった都市であり、文化機能を政治力と結合した道徳宗教がゆきわたり、知識層が知的發展を促し、民俗の小なる伝統は偉大なる伝統に変化し、支配者が支配の方法を決定するのである<sup>26</sup>。

東南アジアに印度文明の与えた著しい影響は孤立化し、人々の行動が部族や村落をすることの無かったところに広大な地域を支配する王制が現れたことである。印度文明を受入れる原因となったのは、第一に灌漑や道路の建設は局地レベルでは行えず、仕事の割当てに中央政府を要したこと、第二に土着人は首長を土地の神の体現であるとみており、精神的指導者とみていたから、印度の宇宙哲学から出る天と地との仲介者としての王権の概念は受け入れる用意ができていた。第三に土着の集団は各々特定の慣習法をもっていたが、印度の慣習法は村々にわたって統一性を強制することなしに、従来の排他主義を無効にし全体を統合することが出来たのである<sup>27</sup>。

東南アジアの聖なる宗教政治都市の成立は印度文明の伝播に負うことが多いが、これは土着文化と無縁なものから發展したのではなく、土着の支配層や知識層が土着の小なる伝統の中に已

に存在したものを印度文明を借用して偉大な伝統に再構成することによって出来上った都市であって、沿岸市場都市が異種混合変容都市であったのに反して此の聖なる都市は系統発生的変容の都市であった。

聖なる都市とは性格を異にした沿岸市場都市は已に述べたように16世紀の西欧の植民者が到来する遙に以前、一世紀の頃から東南アジアには発達してきた。

沿岸市場都市も内陸の聖なる都市と同様に夫々王の支配下にあり、印度洋や南シナ海を通じて結合の網を構成していた市場を核とする都市国家であった。王は陸上に土地をもっていたが、其の収入の多くは貿易に依存し、此の都市の繁栄と衰亡は外国との商業関係や都市の後背地をなす陸上の物的豊かさを反映していた。良港があり更に農産物や森林からの産物のあるところで印度化された官僚よりなる政治、宗教的統合機関が作られ、また市場ができたところに王国があり、その中核に沿岸市場都市ができた。

此の王国の王は必要とする富を都市市場や港への課税、自ら行う貿易からの利益、海賊行為、奴隷売買から獲得したから、内陸の聖なる都市が農民に対する賦役や税に依存していたのとは異っている。沿岸市場都市は伝統的で保守的な内陸の聖なる都市とは異って北及び西からの幾波もの移民によってもたらされる可成りこととなった言語、習慣、宗教をもった地域であり異種の文化が混在する都市であった。<sup>29</sup>

此の都市には土着人のほか印度人のみでなくモスLEMや中国人が多く、小貿易商、職人、商人であって、民族によって夫々異った地区に居住し、異ったギルドを構成し、また彼等は移動がばいしから、王や土着住民との結合は弱く、表面的であって、半ば王の支配から独立していた。彼等の間で守らるべき共通のルールは

市場に於ける円滑な取引に必要な限度のもので、文化的なものではなく、商取引の技術が支配的であった。高い生活をしていた外国の貴族商人の市場への参加はあっても、其の力は聖なる都市の場合より強いとは言え、政治を動かす力にはなっていなかった。王が此等異種の人々を政治的に統合する方法は印度文明の影響を受けた宇宙哲学であったが、此れは異った文化をもった外国商人にとって意味のあるものではなく、コンセンサスを形成する基礎にはならなかった。かくて沿岸市場都市はコスモポリタンであり、利害打算の支配する俗なる社会であった。<sup>29</sup>

沿岸市場都市は景観的にも計画に基づいて周到に秩序づけられ構成された内陸の聖なる都市とは著しい対照をなしていた。聖なる都市を特色づける永続性をもった多くの石や練瓦の壁、寺院、宮殿、記念碑、門に代って沿岸市場都市は竹で作られた素朴な建物からなり、城壁も非永続的な木の矢来からなっていた。<sup>30</sup>

此等の都市では聖なる都市のように農民の労働力を動員することは出来なかったから、石の記念碑的な建物は建設されず、都市の拡大のための充分な土地も無かったから、船上や浮屋のようなものに住む水上生活者も多かった。<sup>31</sup>

此等の都市では火災の危険が多く、土着の上層は財産をまもるために住居のそばに練瓦の建物を建てていた。王の宮殿は印度の宇宙的モデルを反映していても、外国商人のコミュニティは分散しており、象徴的、計画的に造られた聖なる都市に比して無秩序であった。<sup>32</sup>

沿岸市場都市は多く貿易に依存していたから、地方及び国際的な商業の状況に応じて繁栄し或は衰亡し、短命であった。沿岸諸王国は周辺の村落を支配下に置かんと相争い、侵略と合併と分裂の絶えない過程があったから国境も絶えず変化した。<sup>33</sup>

沿岸市場都市の形成は原初的都市化の過程に生じた内陸の聖なる都市とは異って異種の文化をもった諸民族の接触の結果、即ち二次的都市化の結果生じたのであった。都市に於ける人々の行為を規制するものは伝統的な文化ではなく、自己利益と金銭的打算的行為であり、経済的行為を合理的に行うための技術的秩序に基づく合意である。人々の有する異った文化を保持しつつ経済合理性に於て相互に行為するために人々はコスモポリタンとなり、都市全体は聖なる都市の系統発生的変容とはことな<sup>34</sup>って俗なる異種混合的変容の都市であった。

東南アジアの人々にとって王国と都市の発生は都市を中核として広い範囲にわたる地域を王と其の官僚を頂点として組織立て、その範囲の人々に王国に属する人間であることを知らしめることになった。王と僧侶と官僚は印度文明を借用して周辺の土地や村落を政治、宗教、軍事的組織を通じて、全体としての統合活動の中に巻き込んだ。

王はバラモンの儀式を通じて其の神聖性と正当性を広い地域にわたって認められ、其の支配の能力を強めた。また王は官僚制度や都市的制度や都市の巨大な土木工事を完成し、広範囲にわたる灌漑や道路建設を行ったことは王の威信を地方に浸透してゆくに役立った。

村民は王の公共事業に対する労働の義務、軍役、農業生産物の供出は神の心を鎮めるために組織化された奉仕として役立つと考え、それなしには国も国民も栄えることの出来ない小宇宙と大宇宙の間の調和を維持するための計画であ<sup>35</sup>った。

かくて偉大なる伝統は聖典、記念碑、寺院、宮殿、美術、礼拝や儀式、法や行政軍事組織、公共事業等象徴的な紐帯或は直接的に物質或は人間の組織等を通じて都市と農村の間に共同の了解、共属の意識を発展して、多く分散孤立し

ていた村落は王国や都市に統合された。そして偉大なる伝統と小なる伝統が結合されて、王国の支配範囲と共に其の境界を次第に明かにした。

戦時には王の軍隊は王に協力する村は安定を保つに有益であることを認知させる一方、王への労働の供出や生産物の上納を拒否する村には教化と破壊とを以て臨んだ。王は毎年村が労働や生産物を宮廷に供出することを通じて、村の王への忠誠心を確認した。<sup>36</sup>

都市には政治、宗教的制度、市場及び物質的施設が整っても、王の支配する諸地域全体が統一された政治、宗教的理念或は文明を反映しているとは限らない。都市の権威の影響は遠くなる程弱まり、神権的な王の位置から外に向って放射する形をとり、最もへだたった地域はしばしば不安定な前線であり、官僚の統合活動の範囲を脱しているところもあ<sup>37</sup>った。

都市の発生の早期には神権的な王は村の人間を支配し、また物的富を獲得する為に軍事力を強調すること<sup>38</sup>もあ<sup>39</sup>った。

王が地方の支配者を排除して支配せんとする場合や役人の農民に対する過酷な搾取に対し村が抵抗することがあり、村をあげて移住すること<sup>40</sup>もあ<sup>41</sup>った。此等農民の一揆のみでなく、王朝には王位の継承に関する不確定性と王位の篡奪の問題もあり、王朝の地位はゆるぎ或は代わることはあっても、王の国家支配の基本的な構造は変化せず、不安定な形で続いた。

此のような過程をへながら都市の興隆につれて、村落の居住者は行政首都の権威を認めるようになり、王国の領地の拡大整備は東南アジアの諸地方で次第に進んでいった。

しかし小なる伝統は村落レベルに於ける秩序維持の体系として役立つ一方、偉大なる伝統は知識層のみが理解し、村落のブラマンは部分を媒介するに役立つが、一般人に充分浸透するわ

けではない。村落は小なる伝統を保持して、前都市的な文化の要素が存在した。<sup>38</sup>かくて東南アジアは小なる伝統を持つ村落と偉大な伝統の位置としての都市と言う性格を異にした地域よりなる二重の構造をなしていた。

植民地となる以前の東南アジアでは首都は王国を構成する基礎となった政治、宗教、軍事的な統合機関の位置であり、此等の統合機関の安定的な権力的統合活動の及ぶ限りに於て王国は統一ある体系を維持し得た。しかし此等王国及び首都は安定したものではなく、王国相互の不断の争い、王位の不確定、商業状況の変化、王の支配に対する村落の反抗、王国よりの分裂等のため都市の位置のみでなく、王国自身も変化し続けていた。

かくて都市の位置の長期にわたる固定性は無かったが権力的統合中心としての機能は都市の本質をなすものであり、首都は政治宗教的或は経済的な統合機関を通じて王の権力と権威を保持する王国の中核であり、王の権威を示す政治、宗教、美術的なシンボルであり、王国全体を統合する中心であった。

東南アジアが西欧の侵入を受けて、植民地拠点都市即ちプライメイト・シティと言われる唯一の大都市が全体社会の統合中心としての役割をとり、王国の首都にとって代るまでは此等の都市は王国の伝統的な政治、宗教、経済組織の中核としての役割を果たしていた。プライメイト・シティが全体社会の統合中心となるにつれて系統発生的変容の聖なる都市及び異種混合的変容の都市としての沿岸市場都市は独立の王国の都市としての機能を奪われて、地方の町の地位をしめるに過ぎないものになり、王国の文化或は文明的伝統は西欧文明の影響を受けて次第に変質し或は解体に向っていった。

### 引用文献

- (1) Takeo Yazaki, *Social Change and the City in Japan*, Japan Publications Inc. San Francisco, 1968.  
Takeo Yazaki, *The Japanese City* Japan Publications Inc. San Francisco. 1963.  
矢崎武夫, 日本都市の発展過程, 弘文堂 1962.  
矢崎武夫, 日本都市の社会理論, 学陽書房 1963.
- (2) Clifford Geertz, *The Development of the Javanese Economy: A Socio-Cultural Approach*, Center for International Studies, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge Mass. 1956. pp. 26-28.
- (3) Ibid., pp. 39-40.
- (4) Robert R. Reed, "Indigenous Urbanism in South East Asia" in Y. M. Yeung and C. P. Lo eds. *Changing South East Asian Cities, Readings on Urbanization*. Oxford Univ. Press 1976.
- (5) C. Geertz, op. cit., p. 41.
- (6) Ibid., p. 41.  
R. R. Read., op. cit.,
- (7) C. Geertz, Ibid, pp. 82-83.
- (8) Paul Wheatley, *The Golden Khersonese: Studies in the Historical Geography of the Malay Peninsula before A.D. 1500*, Kuala Lumpur. 1961. pp. 185-6.
- (9) Ibid., p. 186.
- (10) J. C. van Leur, *Indonesian Trade and Society, Essays in Asian Social and Economic History*, W. van Hoere Ltd. The Hague, Bondung, 1955. p. 104.
- (11) P. Wheatley, op. cit., pp. 42-43.
- (12) R. R. Read., op. cit.,
- (13) Robert Heine-Geldern, "Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia," *The Far Eastern Quarterly*. Vol II. November 1942-August 1943.
- (14) Ibid.
- (15) Ibid.
- (16) Ibid.
- (17) Ibid.
- (18) Ibid.
- (19) Ibid.
- (20) J. C. van Leur, op. cit., pp. 56-57.

- 21) Roads Murphey, "Traditionalism and Colonialism, Changing Urban Roles in Asia," *Journal of Asian Studies* 29, pp. 67-84. 1969.
- 22) J. E. Spencer, *Land and People in the Philippines*, Berkeley and Los Angeles, 1954. p. 140.
- 23) Hugh Tinker, *Reorientations: Studies on Asia in Transition*, Pall Mall Press, London. 1965. p. 31.
- 24) Paul Wheatley, "What the Greatness of the City is paid to be," *Pacific View Point* 4. 1963.
- 25) T. G. McGee, *The Southeast Asian Cities*. Fiederick A. Prager, 1967. pp. 34-36.
- 26) Robert Redfield and Milton Singer, "The Cultural Role of Cities", *Economic Development and Cultural Change*, 3. 1954.
- 27) G. Coedès, *The Making of South East Asia*, Routledge & Kegan Paul, 1962. p. 219.
- 28) N. Keyfitz, "The Ecology of Indonesian Cities" *American Journal of Sociology*, 66. 1961.
- 29) C. Geertz, op. cit., pp. 61-62.
- 30) Paul Wheatley, op. cit., p. 49.
- 31) T. G. McGee, op. cit., p. 34.
- 32) Ibid., p. 33.
- 33) P. Wheatley, *Impressions of the Malay Peninsula in Ancient Times*, Singapore. 1964.
- 34) Robert Redfield and Milton Singer, op. cit.,
- 35) P. Wheatley, *The Pivot of the Four Quarters: A Preliminary Enquiry into the Origins and Character of the Ancient Chinese City*, Chicago, 1971. p. 254.
- 36) R. R. Read, op. cit.,
- 37) C. Geertz, op. cit., pp. 42-3, pp. 48-9.
- 38) Ibid., pp. 41-3.
- 39) W. F. Wertheim, *Indonesian Society in Transition: Study of Social Change*, The Hague. 1964. pp. 282-6.
- 40) 矢崎武夫, "国際秩序の変化過程に於ける発展途上国の近代化と都市化" 慶応義塾大学法学研究 第54巻6号, 1982.

(やざき たけお 本学教授)